

西藏喇嘛教史

(第一回)

寺本婉雅

序

本史の原著者は、その名を持律者イーシ・チャルツァン (Ye-ges Rgyal-mTshan) と云ふ。達頼喇嘛第八世ジャムバル・チャムン (Jam-dPal Rgyal-mTsho; A.D. 1758-1805) の師傅として、近世喇嘛教史に於ける有名なる西藏學者なり。彼は藏州(ツァン)に生れ、父は薩迦派 (sa-Skya-Pa) の修驗者にして、蓮華生上師(ドモ、サムスハ)の教義を信じ、常に深山幽谷を跋涉し、洞窟に入りて冥想を凝せり、彼が妻は獨り空閨を守り、夫の不在を恨み、遂に貞操を破りて他人に通じぬ、彼はこれを聞き、離縁せんとし、人を介して財産の等分を計らしむ、夫妻の間に可憐の一男兒あり、夫妻は相互にその愛兒を爭奪せんとし、母は竊かに愛兒に言ひ含むるに、若し媒人が汝に向ひ、父母何れに隨順するやを問はば、汝は母に隨順すべきを以てすべしと、媒人來りて財産を等分し、衆人の面前に於て兒に向ひ、向ふて曰く、汝は父母何れに従屬するや、心の欲するまゝに附いて去るべしと、可憐の愛兒は大聲を發し、父に隨順するを喜ぶものなりと答へぬ。母之を聽き、地に伏して號泣せしも、勝利は父の手に落ち

ぬ。斯くて父は愛兒を伴ひて獨棲し、兒童の教養に心を竭し、専ら成長を望みて鬱憂を慰めぬ。歲月水の流るゝが如く、兒童は早や八歳になりぬ、父に乞ふて出家せんとせり。父は彼が幼少なるを以て容易に許さず、されど當時藏州ツァンの地方官は一般庶民に對し、一戸に男兒二名以上を有せば、必ずその一人を出家せしむべき旨を命せり、父は官令の強制の甚だ無理なるを思ひて、容易に愛兒の志願を聽かざりき。彼長じて十一歳となるや、父は扎什倫布チャシ、ルンポ(Bkra-gis 'Jhun-po)の大學に有徳の喇嘛あるを聞き、往きて謁し愛兒の出家を懇請せり。志願を容れられたる彼は師の下に螢雪の勞を積み、扎什倫布大學に入りては聰明の才智顯はれ、幾千の學徒中忽ち頭角を表はし、彼二十六歳にして大學より學位を授かりぬ。その頃藏州ツァンの南山に一隱士の洞窟的生活をなし、世塵を避けて淨行に餘念なきものあり、彼は隱士の草庵を叩きて入門し、隱士の薰陶を受け、別にその傍に茅廬を結び、禪定に入りて觀念の座を離れざること六年の久しきに及べり、道行益々高く、心月愈々澄む、是れ正に彼が三十二歳の頃なりき。後一たび市に出で故郷を訪ね、再び山に入り、淨行に身心を碎くこと亦六星霜を経たり。彼が高徳の世に知られ、洽ねく沙門の淨行を風靡するに及び、招致せられて達賴喇嘛第八世の師傅に選ばれる。時の支那皇帝は彼に班抵達パンテイダ(五明博士)の尊號を贈與してその徳を賞し、以て達賴夾輔の任を命せり。

彼、天性聰明、博覽強記、廣く諸典に通じ、當時學者中錚々たるものなりと稱せられ、彼が喇嘛

としての價値は、本史の記述に就てその一斑を推知し得べきなり。

本史原典は予が第三回入藏の際途上、支那甘肅省西寧府の西南一日里程の安土地 (Amndo) にある黃教開祖宗喀巴ツォンカバの誕生せる靈廟塔爾寺 (Skul-tsum) に於て、師事せしゾバ・サンボ (bTod-pa bZom-po) より轉寫し、併せてこれを譯出せしものなり、ゾバ・サンボは塔爾寺に於ける宗喀巴の生父の轉生化身として世襲せる阿嘉胡圖克圖喇嘛アチヤフツククトクの公邸の執事なり、予は彼に師從し、又彼の援助に依て最初に入藏するを得たる恩人なり。彼は學者にして亦佛畫師なり、而して活脫法と稱する一貫張製法の佛師なり、初め粘土にて原型の偶像を作り、外部より布片を幾重にも糊膠にて貼附し、稍乾燥するを埃ち、外部より篋を持ちて、偶像の相好、衣裳の皺襞を附し布面に形態を出現せしめ、乾燥の後、内部の粘土原型を毀ち、土碎を總て脱出し、此に原型の外皮のみを残し、宛然一貫張の活偶像たらしむ。かくて種類に應じて種々の色彩を施し、佛像を創作す。起臥を共にせし譯者は、屢彼が創作場に入出して之を目撃するを得たり。學者にして藝術家たる彼は予に授くるに本史原典を以てす、仍てその指導の下に譯出せしは、げに思ひ出多き史料なり。本史は原名を戒律源流 (jDni-Bai-chos-byun) チョフユン、その内容は西藏史と、西藏佛教とを敘述し、而して僅かに西藏に於ける戒律傳系の相承を記せるものなるが故に、内容質量に應じて西藏喇嘛教史と題せり、本史は固より完全なる喇嘛教史なりと言ふ能はざれども、西藏佛教學者の史編としては稍整頓せられたる史料なれ

ば、初めて西藏佛教を研究せんとする者に、多少西藏史の概念を供給し得べくば幸なり。聊か原著者の略傳と、本史譯出に就いての師恩の關係を敘述し、以て自序に代へぬ。(大正九年二月五日)

目次

第一章 歴史以前の西藏

第一節 西藏神話時代

佛陀の雪山佛教傳播の懸記——西藏人種の起源——天降の主——天人七代——地人六代

第二節 西藏歴史以前の佛教

天降の經典——西藏佛教の起源——吃提蘇隆贊甘普の西藏統一

第二章 西藏佛教の傳來

第一節 西藏の文化

最初の聖典翻譯——法律の創定——印度佛像の將來

第二節 印度支那文明の輸入

ネパール國公主の降嫁——文成公主の降嫁——拉薩は古代の湖水——拉薩大伽藍の建立

第三節 佛教發達の動機

請來佛像の緣起——堂内の壁畫と銘文——于闐沙門來藏——第二回聖典翻譯——王の臨終の遺誠

第四節 西藏佛教隆盛時代

第三回聖典翻譯——金城公主とナナム妃との争ひ——菩提薩埵の來藏——蓮華生上師の來藏——サムエー廟の壁畫——第四回聖典翻譯——菩提薩埵の示寂

第五節 西藏佛教の確立

支那僧の勢力——支那教學派と印度教學派との争論——支那教學派の敗走——第五回聖典翻譯——祖宗の三主

第三章 西藏の闇黒時代

第一節 佛教の破壊

ランダルマ王の佛教破壊——ランダルマ王の暗殺

第二節 西藏國外に於ける佛教再興時代

西藏佛教回復——逃亡者の具足戒會の再興——全藏の十哲——復興事業——ルーメ門の門下

第三節 毘那耶繼承の上下兩系

下系の毘那耶——上系の毘那耶——前後兩系の繼承——ドルゼ・シンシユク門下の傳導——弟子
二十四名の分境的布教——ツォンツェンセラブセンゲ喇嘛の弟子——毘那耶の三系——第六回
聖典翻譯

第四章 西藏佛教混沌時代

第一節 佛教刷新の氣運

秘密修驗者の流行——阿捉沙の招聘

第二節 ガーダムバ正統派の確立

ガーダムバ派の教義——第七回聖典翻譯——ワンシユクツチムの傳導——甘珠爾部の請來

第三節 教學の勃興

ワンシユクツチム派の教勢時代——門下の四柱——門下の十棟——ザンモ派の教勢——ローサ
寺派の教勢——ワンシユクの門下——怕克巴喇嘛とその師——ダンザ道場兵亂を逸る——支那
帝の奘學

第四節 西藏に於けるカンツェンシツォ師の傳系

カンツェンシツォ師の傳系——著者の授戒系

第五節 班禪釋迦室利の傳系

釋迦室利の傳系——班禪の幼時——班禪の教儀——梵藏兩文の書翰

第六節 班禪師の來藏とその分派

班禪と布薩會——薩迦派——西藏佛教の隆盛——班禪系の四派——班禪以下の毘那耶の傳燈

第七節 班禪系の毘那耶の傳布

班禪と其弟子——ブトンリンボツエ喇嘛と著書——林眼衆派の緣起——烏池衆派と其傳系——

法令衆派——僧伽滿衆派

第五章 西藏佛教の改革

第一節 新教黃派の樹立と宗喀巴

宗教闇黒時代——宗喀巴の宗教改革——舊教各派の弊害——經と曼特羅との研究——改新の旗

幟——ガルダン寺建立——ゲンドウンチュブの傳系——ゲンドウンチュブの著書——扎什倫布大

學の創立——宗喀巴の委任——チャグバ・チャルツァンの著書——レブン大學の創立——改新の

偉業

第二節 新教の勢力、宗喀巴門下の著書

新教青海より起る——新教黃派の版圖——阿提沙の靈感——四個大學——宗喀巴弟子の著書

第六章 喇嘛教黃派の教義

戒律説明の四分別——第二翻譯の教禮に就て——第三本文の意義に就て——沙彌の制規——具足戒の制約の三方法——齊戒の日規——長老の二十一要件

本文

第一章 歴史以前の西藏

第一節 西藏の神話時代

佛陀の雪山佛教傳播の懸記 五濁世界の教主釋尊の此土に出現し、三たび法輪を轉じて一切衆生を救濟し給ひしこと極まりなし。その慈愛の無邊廣大なるや、雪山國中に妙法を傳布し、無明妄念に依て懊惱せる人類を濟化せんとし、自から五百羅漢と共に、西藏の水源、大雪山の巔テ七峯に登り、佛教を傳播すべきを宣言し、未來の沙門傳導者も教法宣布に就ては、亦斯の如くすべきを訓誡し給へり。而して佛陀自からネパール國に巡錫し、天然塔を視、瞿摩娑羅香提地ゴマサラガンドハの北山連脈の大丘

上に登り、北方を眺め、雪の國(西藏)に速かに佛教の傳播せんことを念じ、牛頭懸記經 (Glan-Ru Lun-bStan-Gyi-m Do) を説き給へり。かくて後ち佛陀の涅槃を示し給ふや、特に頭北面右脇にし給へり、思ふにこは未來西藏(雪山國)中に佛教傳播の識を表示し給ひしものにあらざるか。

西藏人種の起源

文殊師利根本坦特羅經 (hJam-dPal Rtsa-Rgyud) に據れば、如來の教法は種々の事業に由て行はれ、何れの場所にも護持し、何時にても興起すべしと。佛國 (Lha-Ldan Yu) を名くる雪山中に、昔一王 (Lha) あり、王は摩揭陀國毘舍利的貴族梨茶毘族 (Licchavi) より出づ、王は西藏人の幸福を増進し、遂に人の主なる國王に登り、國を禦すること八十年、新制度を制定し、慈惠を庶民に垂れ、呪法を奉じて國土靜謐なりき。ロム・トンバ (hBlom-Ston-Pa) の開立せるカーダムバ派 (hKa-h-g Dams-Pa) の勸令集に據れば、一般庶民の救濟主あり、特に雪山に來りて王國を建設す、是れに依て西藏は平和を得て、人權を確保するを得べしと。

西藏人種の起源に就て古書を涉獵せんか、或ひは印度憍薩羅國の新勝族 (gSar-Rgyal) より出でし某王が西藏に逃れ來りしに起因すと云ふ。或ひは一説に頻毘沙羅王の子ヒナバラ (Hinabala? Stobo-Chun) の一子が西藏に迷ひ來りしに起源すと云ふ。或ひはバドサ國の優陀延王 (hChar-Byed; Vdayana?) の子が西藏に逃れ來りしに起源すと云へり。蘇隆贊甘普王の著王令百千集 (Rgyal-Po bKa-h-Bum) に據れば阿育王の支族なりと云へり。文殊師利根本坦特羅經の説には、釋迦族には、

大釋迦 (Mahasakya) と、釋迦巖山族 (chakya Ri-Brag-pa) と、釋迦梨茶毘族との三族あり、その中梨茶毘族より出でしものなりと云へり。かく西藏人種起源説には多説ありて、未だ一定の説あるを見ず。今假りに王令百千集の説の釋迦巖山族の源流なりといへる説に従ひて、西藏人種の起源を叙せんとす。

天降の主

釋迦巖山族に屬する王族が當時印度を逃亡して西藏に來れるもの多かりき、彼等の中、

或ものが藏州ツァンの雅龍藏布河ヤルンツァンボのソカ地 (Lho-kha) に於ける神峯 (Lha-Rse) の山麓に彷徨し來りしとき、多くの西藏土着民は彼等を見て、何處より來り、何族に屬するやを尋ねしに、相互の言語不通に依り、彼は天空に指を示して彼處より來れりと答へぬ。衆人思へらく彼は是れ天降の神人なり、吾等庶民の君主たるべしとて、四人にて彼を肩に負ひ、伴ひ去りて彼を衆中の王に立てぬ。時人彼を稱してニャーチー・ツァンボ (gNah-khri bTsan-po; 肩上に負はれ、玉座の椅子に登りし強力者の意味) と呼べり、即ち是西藏王統者の起源とす。

天人七代

ニャーチー・ツァンボ王の子ムチー・ツァンボ (dMukhri bTsan-po)、その子ズインチー・ツァンボ (Din-khri bTsan-po)、其子ソチー・ツァンボ (So-khri bTsan-po)、其子イチー・ツァンボ (Yi-khri

bTsan-po、其子ズリチー・ツァンボ (gDag-khri bTsan-po)、其子スリチー・ツァンボ (Sri-khri bTsan-

po) と各次第繼承せり、是を天降の七尊と稱し、彼等は皆熱心なるボンボ教 (Bon-po) の信者なり。

地人六代 スリチー王の第三子ポデー・グンチャル (Spo-De Guñ-Rgyal) は王位に即ちて西藏を御せしが、後其子アショレク (A-go Legs) を經て、其子イシヨレク (Y-go Legs) に至り、始めて城廓を築きぬ、名けてトクツェ城 (Tog-Rtse) と云ふ、是れ西藏に於ける城砦建築の濫觴とす。其子デシヨレク (De-go Legs)、其子グルブ・レク (Gu-Rub Legs)、其子ロンゼー・レク (bBron-Rje Legs)、其子トシヨレク (Tho-go Legs) は各次王統を繼承せり、是を地人の六王と稱す。

第二節 西藏歴史以前の佛教

天降の經典 地人六代の最後の王トシヨレクの子ナムミン・デー王 (Rnam-Zin Lde)、其子デー・ノルナム (Lde Snol-gNam) よりゼー・トクツァン (Rje Thog-bTsan) に至るまで二十六代を經て有名な王出でたり、ト・リ・ニャンツァン王 (Tho-Tho-Ri g'Nam-bTsan) と云ふ、王はヤンブ・ラーガン山 (Yan-bu Gla-Sgan) の崗上に宮殿を築きて居住せり、時に天空より一籠降る、王怪みて之を聞き見れば、即ち左の如き經典寶塔出でたり。

- 一、寶器莊嚴經 (漢譯の大方廣寶
篋經) (Ratnakarandakam
(Za-ka-Tog ikod-Pa))
- 二、百拜懺悔經 (Span-bSkon Phyang-Rgya-Pa)
- 三、十善經 (dGe-bGuh'i mDo)

四、十一因緣經 (Rten-^{テン}-j^ツh^ツBrel b^ユCu-g^ニNis-^ニkyi mDo)

五、黃金寶塔一基、其外諸品。

西藏佛敎の起源

當時西藏には未だ文字の發明なかりしかば、誰もその經典を讀むものあらざりき。一夜トトリ・ニャンツァン王は、夢に王人五代を経はその經典の文義を解するもの出づべしと見ぬ、驚きて群臣を集め、夢の次第を告げて吉祥を稱しぬ、群臣は何の意なるやを知らざるも、天降の經典は必ず靈感あるべしとて、その經典を崇敬し、日々供物を捧げ、夜は燈明を献じて祈念し、假りに名を附して秘密猛烈書 (g^ガNan-Po g^ガSan-Ba) と名けぬ。是れより庶民はこゝに往詣して禮拜し、各自の冥福を祈願せり。王はこの恩恵力に依て目的を遂げ、人民統禦に尤も便利を得たり、王は百二十歳に及び、臨終に群臣に遺誡して曰く、この雪山王國に住する庶民よ、汝等の禍福發生の分岐は、一にこの秘密の經典を信ずると否とに因るべし、わが行ひし如く、汝等もこの猛烈靈驗の秘典を拜して各自の祈願をなせ、汝等の禍福は汝等の信念の裡に存すと。西藏佛敎の起源蓋しこゝに始まると云へり。

吃提蘇隆甘普王の西藏統一

トトリ・ニャンツァン王の子チー・ニヤズ・ズンツァン王 (phri g^ガNan-

Zun b^ツTsan-Po)、其子ロク・ニャンデッ王 (j^ハBrog g^ガNan-Ldeju)、其子ミールン王 (d^ムMus-Lon)に至る、

王は國を統御し、かの秘密經典を無意義に崇拜せり、王生れながら盲目なれば、父王は憂ひて醫士

を呼びて治療せしめしに、眼は開きて物を視るを得、眼光炯々として虎の獸類を凝視するに似たり、故に世人呼びてタクリ・ニャンジク (Srag-Ri gNam-gZigs) と稱せり。王の子にナムリ・スロンツァン王 (gNam-Ri Sron-bTsan) あり、彼の妃をツェボン・ザーチャ・トカル (Thse-Spon bZah-lBri-Ma Thod-dkar) スィン、王妃の間に一子を擧げ、名をチデー・スロン・ツァン (khrilDe Sron-bTsan) と命ず、父母の鍾愛甞ならず、將來の望みをこの嬰兒に屬しぬ。王子十三歳に達して、父母に乞ふに、西藏國を領して社會民庶の智徳を開發せしめん、教法を宣傳し、以て西藏文化の發達を庶幾すと、父母甚だ喜び、彼の願を容れぬ。彼は王位に即き、内は人民の幸福と安寧とを企圖し、外は武威を以て境外に振ひ、群勇割據せる西藏國の諸酋族を討伐して國家の統一を謀り、各地に散在せる諸酋族は驅せ來りて、皆王權の旗下に服し、各貢物を納むるに至れり。

第二章 西藏佛教の傳來

第一節 西藏の文化

最初聖典の翻譯

西藏建國の英傑チー・スロンツァン王の代には、西藏には未だ文字の發明あらず。王は國家を統一し、民智を啓發するに、無文時代の甚だ不便極まるを感じ、大臣トンミ・サムブキタ等十六人を印度に派遣し、印度文學を研究せしむ。彼は班抵達ハイイリクバ・センダ (Lhaji

Rigs-Pa Sen-Ge 提婆族獅子)に就て學び、迦濕彌羅文字より西藏の言葉に對照相應して、子音三十字と、母音四字とを創定し、西藏の新文學を發明し、更に聲字註釋書八卷を著はせり。彼は印度に留學すること四年にして西藏に還り、文字の創定と共に如上の寶器莊嚴經、百拜懺悔經、三寶雲經 (dkon-mehog Sprin-Pa; Ranamegha) を譯せり、是れ西藏に於ける佛典翻譯の濫觴にて、又文學の始めなり。

法律の創定 王は文字の創定に依て教法を宣布せんとし、先づ十善經に依て國家の立法的精神を標定し、法律制度を定め、自から萬民に望むに有道の君、護法の主として自任し、西藏國として開發進歩せしめんと期し、王は努めて十善を勵行し、十惡を避けしめたり。若し人十惡を行はば罰法を以て處し、人を殺さば死刑に處し、竊盜罪を犯さば八倍或ひは九倍の贖刑を以て律する等の多くの新法律を創定せり。王は全身を提げて人智の開發と、國民民富とに盡瘁して西藏建國の基礎を確立せり。文字の發明は闇澹たる西藏文化の曙光を放ち、王の偉業に燦爛たる美觀を發揮せしめて、茲に西藏の統一は亞細亞の高原に樹立せられぬ。當時の人民は王の威徳を讚じ、その名を呼んでスロンツァン・ガンボ (Sron-bTsan Sgam-Po) と稱せり、是れ「忠實にして有力なる成功者」なりと稱へし意なり。

印度佛像の將來

王は思へらく、西藏に佛教を弘通せんには、之が方便として諸菩薩のイードム

(Yi-Dam)を請來するに如かずとなし、乃ち比丘マテイ・シーラ (Ma-Ti chi-La)なるものを印度に派遣してこれが畫像を求めしむ、比丘は多くの從者を伴ひ、南方錫崙島に渡りて探索せり。或る一沙原に大象の眠れるあり、これを怪しみて其處を掘りしに青色栴檀の香木を得たり、これを割くに中より丈一尋の十一面千手の觀音像を得たり、紅色にして相好端嚴にして甚だ功妙を極む。又南方普陀山^{ボクタラ}に到りて求むるに、一夜月光に依りて花咲ける栴檀を見ぬ、世に所謂ゴルシ、シャ即ち牛頭狀の香木と稱するものなり、その香木の下に於て法塔一臺を拾ひぬ。又海岸の邊を逍遙し、處々に佛像の散在せるを發見してこれを蒐集せり。又蓮華輪塔の内より佛舍利四粒を得たり。或ひは摩揭陀に到り、多くの菩提樹の蔭下より多くの法塔を拾ひぬ。その外八大寶塔の所在地、及び恒河の河畔に於て、釋迦の造像の多くあるを發見し、これ等を携へて西藏に還り以てスロンツァン・ガンボ王に獻納せり。王はこれ等を得て大いに歡喜し、總てこれ等の佛像寶塔をマルボ山 (dMar-po Ri)の宮殿に安置せり。

第一節 印度支那文明の輸入

ネパール公主の降嫁 王は西藏の統一殆んどその緒に就かんとするや自から王統繼嗣の必要を感じ、これが適當なる配偶王妃を求めんことを望みぬ。又佛教をして西藏國に傳播すべき恰好の因縁

として、これが佛像二軀を支那及びチバルの兩國より將來せんと欲す。こゝに於て大臣ガル (Blon-Po J̄gar) をチバル國に派遣し、國王アムスブル (Amisu-Yarma; Hod-Zer Go-Cha; 光明) の公主チツン (Khr̄i-B̄sun) を迎へしむ。ガル大臣は詔函を奉じ、馬一百頭に財寶を積み、多くの贈品を齎らし國王に謁し具さに事の趣きを奉請す、アムスバル王喜びてチツン公主の婚嫁を許す、公主は西藏に嫁するに及ぶや、父王に乞ひて阿闍佛 (Mi-b-Skyod Rdo-Rje; akshobhya)、彌勒法輪佛 (Byams-Pa Chos-J̄Khor-Ma)、梅檀彫刻の數度佛母 (Sgrol-Ma) 及び經典等を持參す。父子相別るゝに臨み、父王公主を訓誡して曰く、昔より婦女子は親の膝下に留るの例あるなし。この故に汝公主よ、去りて衛州 (dBus) に行きて西藏王の心を慰め、國の法規風習の模範となれよ、かの地に着せば時期に際して城砦を築き、伽藍を建て、佛像經典を安置し、佛法を崇禮せよ。西藏民にして淳樸溫良なる者には、施すに慈惠を以てすべし。一般の賤民には、愛情を以て接する猶慈母の其子を愛するが如くすべし、一切の善根は總てこれを施行し、あらゆる罪惡は悉皆廢棄すべし。而してこの至深顯瞭なる聖法は、誠に西藏國民を救濟するの心髓なりと。公主は父王の膝下を離れ、故國を辭して、遠くチバル國と、西藏との境界に至るや、山嶮にして峻坂多く、一路斷崖崢嶸として行路頗る難し、公主は處々親から徒步してこの嶮山峻峯を越え、漸くチロン (Skryid-Gron) の小邑に到り、順次各驛を経て衛州 (Wai) に着しぬ、時に公主は年十六歳なり、世に之を紅顏なるチヨル・

チャン・ヤ (Khiro-^{チヨ}Mer Can-Ma; Mukuti) の化身と稱し、智慧と財寶との守護者なりと讚す。

文成公主の降嫁

復大臣ガルは馬一百頭に財寶珍品を搭載し、勅書を捧じて支那に使し、洛陽に

到りて唐太祖に謁し、文成公主の降嫁を請ふ。太祖使節を厚く遇し、寛容禮節盡くす。時に公主芳齒僅かに十六、芙蓉の麗苔、清秀の蓮華、未だ人の手に落ちず、諸王争ふてこれを迎へんとす。諸王争ふと雖もガル大臣の如き智能才略には誰も及ぶものなし、多くの請求ありしも、遂にガル大臣の懇請に應じぬ。公主は父王に乞ふに釋迦佛像一軀、その他多くの財産を持って西藏に降嫁せんとす、乃ち父王の許諾を得て將に家庭を離れんとするや、太祖、公主を訓誡して曰く、父の生命としての愛女よ、雪山の國に去かんとせば正にこの言を聽くべし。少女よ汝が小心注意に依て將に行ふべき事項は他なし、去きて速かに西藏國の風俗を考量し、一般國民に對して寛容に處し、忍耐を以て遇すべし。小女よ、汝は體慾を攝し、婦女としての才能に敏慧なれ、言語を少くし、説話は柔和爽快なれ、貯藏に伶俐にして、廣く養育を施すべし、技藝を能くし、多くの働を努めよ。食事は善良なる熟菓を選びて、量を適度に攝せよ。夫に従ふに恭敬を以てし、子女には慈愛なれ、身上の者には敬禮を表し、身下の者には仁慈を垂れよ、人を遇するに平等にして、喧擾の心を避け貧窮乞丐には慈善を施し、禍する怨敵となる勿れ。衣服は更紗木綿にて足る、藝能に熱達せんことを要す、善は歡悅し、惡は斷滅し、一族は和順し、同朋は注意すべし。

なほ常恒の聖法を宣布せんに法輪を轉じ、聖典佛像を堂内に安し、僧伽を尊敬し、戒律を守り、而して菩提心を觀じて實執の觀念を去るべし。かくの如く遂行せば社界の風規を調和するを得て、法に馳背することなく、克く自他の目的意義を成就するを得んか、然らば彼處に於ける一切の同朋は、この恩恵に依て頌讚を表し、祝詞を捧ぐるに至らん、かゝる社會救濟の善業は、即ちこれ佛菩薩の歡喜讚仰し給ふに至らんと。文成公主は父母のこの訓誡を體聽し、釋迦佛像一軀を乞ひ、これを馬車に奉載し、多くの群臣庶民に送られつゝ洛陽を後にして、蕃煙遠く西藏に降嫁しぬ。西藏一般臣民は公主の入藏を悦び、大賀宴を張りて降嫁を奉祝せり。世に文成公主は綠面ターラ女神(Sgrol-Ma)の化身なりと信せらる。

拉薩は古代の湖水 文成公主、及びチツン公主のスロンツァンガンボ王に降嫁せしより、二妃は各自父王の訓誡を奉じ、西藏拉薩に大伽藍を建築し、佛敎宣揚の根本道場たらしめんことを望み、そが志願を王に懇請す。王は二妃の精神の宗敎を以て民を啓發し、國家を輔益し、人文の進歩發達を謀るにあるを觀て、二妃の請願を容れ、拉薩の中央に道場を建築せんとせり。然れども當時はウイチユ河の河畔は未だ悉く沼澤洋々たる湖水に異ならざりしかば、土人はこの地を稱して「牛乳を流せしが如き渺茫たる沼湖」即ちオタンギッホ(Ho-Thah-Gi nTsho)と呼びたり。王はこの廣大渺茫たる沼湖を埋め立て、その上に伽藍を建てんと決しぬ。然れどもこの地には昔より、地主神とし

て崇められつゝありし肉食妖怪女神の仰臥して眠れりと信せられしかば、その怪障を退治せざるべからざるの必要を感じぬ、よつて惡魔女神の天空を仰いで眠れる腹部中央地に根本道場を建つるは正にこれ民の怖畏せる妖怪惡魔を退治するの鍵なりと思惟せり。

土人の口碑 土人の口碑によれば、妖怪女神の右肩はカツアル地(Ska Tshai)に當り、左肩はチャ

ク・チュク地(Rhrag-jhBrng)に當り、右足は後藏ツタン即ち藏州(gTsan)にして、左足はチョムバ・チャン地(Grom-Pa Rgyan)に當るなり。惡魔女神の四本の角上には伽藍四座を立て、右肘はコンボブチユ地(Kon-Po Bu-Chu)にして、左肘は南方チャク・ロンチン地(Brag Khon-nThin)なり。右膝はカチヤク地(Ska-Brag)に、左膝はチャドゥ・マツェ地(Pra-Dn Ma-Rtse)に當る。右掌は北方ツアルデーレン地(Tshal-Gyi Rin)を壓し、左掌は喀木地のダンロンタン地(hDan-Klon Thai)に當りて燈火を持せり。右の足底はマンユル地(Mai-Yul; 西藏とチバル國との接境チロン都邑 Skyid-Gron)に當り、左の足底はモンユル地のブータン國バロ都會(Spa-Gro)及グッセルチュ地(Skyer-Chu)に當ると傳へらる。

拉薩大伽藍建立 王は拉薩の埋立大工事を起さんとして、先づ一千人の工夫を監督し、妖怪女神の腹部と信せらるゝオタン沼湖を石礫土沙を以て埋め立て、材木を打ち込みて地盤を固め、大工事を竣成せしかば、その上に大伽藍を建勅し佛像を安置せり。この因縁を以ての故に、その地を拉薩

(Lha-Sa) 即ち佛地又は王地とも稱するに至りしなり。王はチツン王妃の爲めに、拉薩の中央に大伽藍一字を建て、王妃將來の阿閼佛を奉安し、その殿堂を不思議の殿堂 (hPhur-Snan-Gi gTsong-Lag-Khan) と稱す。又文成公主のために、不思議殿堂の北方數町の處に一伽藍を建て、公主將來の釋迦佛像を安置せり。昔のラモツエ伽藍 (Ro-Mo-Chen gTsong-Lag-Khan) と名くるもの即ちこれなり。

第三節 佛教發達の動機

將來佛像の緣起

文成公主の將來せる釋迦佛像と、チツン公主の持參せる阿閼佛像との緣起をこゝに少しく叙述するは敢て無益に非ざるべし、そは西藏國民の宗教的意識を開發して、信仰の中心結晶となり、西藏國家の進歩發達を促し、文明の要素となりし、最も興味深き歴史を有する重要な靈像なればなり。昔印度に釋迦の前身としての應身の尊像三體ありき。就中その大なるものは釋尊二十五歳の像にして、有名なる佛匠毘須羯磨が青銅その他諸種の五寶を混合して鑄造せるものにして、今はその像三十三天に存在すると傳へらる。その中像は亦これ同佛匠の鑄造に係り、地金は同じく青銅にて鑄、拾二歳の釋迦をかたざれるものなり。この佛像は漸次年處を経て、中印度、摩揭陀國、蔦杖那等を經由し、終に海路支那に傳來せられたり。文成公主がスロンツァンガンボ王に降

嫁せるとき父王に乞ひ、殊に嫁入道具として西藏に將來せしものなり。當時はラモツエ堂内の本尊として安置せられしも、後世に及び不思議殿堂即ち今の拉薩の根本法輪殿に奉安せらるゝもの即ちこれなり。

三體中の小像は是亦毘須羯磨の鑄造に係る八歳の悉多太子を模造せる釋尊の像なり、この像は釋尊自からこれを開眼供養し給ひしものなりといふ。印度よりチパール國に歷傳し、國王アムスバルマンの奉崇持佛となり、國民の歸依最も深かゝりし靈像にして、チツン公主降嫁の際に嫁入道具として持參せるものなり。當時はこれを拉薩首府の中央に不思議殿堂を建勅して安置せしが、後これをラモツエ堂内に轉置せり。今尙ラモツエ堂内の本尊として奉安崇拜せらるゝもの即ち是れなり。

この二軀の佛像は釋尊の眞像そのまゝにして、些少の差異を發見する能はざる程巧妙を極め、何人も一たびこの端像を拜せば、渴仰の念禁する能はざるのみならず、その靈像の因縁はよく解脱の思念を懐ける衆生の目的を遂行せしむべき源泉にして、一切群庶の守護たるべき慈悲の親友たり。殊に雪山國民の平和幸福の享有と否とは、主としてこの二尊崇敬の恩惠力の如何に關係すること忘るべからず。文殊師利根本坦特羅經等諸典に徵するも、この二尊の靈像は、北方西藏國に佛教を宣傳するの契機として多くの求道的勇猛士出で、佛光の宣揚に盡瘁し、その恩寵力の奈何に依つて、西藏國民の平和進歩を開導する所以を記せり。さればこの二尊の靈像が如何に西藏國開發に重要な

る楔となりて、その國民の文化の發達を促がせし動機たりしかを窺ふの傍證たらざらんや。

堂内の壁畫と銘文

王は大伽藍を勅建して、この靈像を安置したるも、尙一層佛教を洽く傳播し、

民をして善因縁を結ばしむる方便を設けんと欲して、拉薩の不思議堂の内壁に猛惡なる面容を有せる八相觀音と、カサルパニ (Kha-Sar-Pa-Ni) の五神、及び釋迦の歷生譚十二種の繪傳を書きぬ。復これと對照に、道徳を鼓吹せん目的にて毘那耶を記し、解脱思念を認解せしむべき目的に經文を書き、智慧到彼岸の思想を練磨せしむべき爲めに論部を抄記せり。又東南地方より來現せりと信せらるゝバルダンハーモ (Pal-dan Lha-Mo, 即ち殘忍恐怖の面相を有して放肆なる行爲を有する女神) の像を彫刻してこれを伽藍塔の守護神となしぬ。

かくて王は敎法弘通を謀るに種々の手段を施し、人民に信仰崇拜を勧め、若し反抗するものあらば、彼等を責むるに罰法を以て擬し、變化妖怪を信する頑迷なる人民はこれを導くに由なきも、時に或ひは頭を斷ち、或ひは眼球を抜き、或ひは皮を剝ぐなど、殘忍酷薄殆ど人道を逸するの暴行を施し、強ひて人民にその信仰を勸諭したり。西藏國民をして一般に佛教に依つて道徳的十善戒を遵修せしめ、佛教の信念要素に依つて、國民の智能を圓滿に發達せしめんとは、即ちこれ王が畢生の理想とせしどころなるべし。而してその殘忍酷薄なる暴行は會々以て王が急激に西藏を開發せんとすの熱心勇猛なる意志の反映の一端なりとして見るべし。

干闥沙門來藏

この時于闐 (Tj-Yut; Khoten) の二人の沙門は、支那帝の命を奉じて王に謁見すべく西藏に來りしが、王の殘忍なる暴行を見て、甚だその危害を恐れぬ、王は沙門を慰めて曰く、朕は西藏國に聖教を弘通する大慈悲者なり。汝等敢て恐る勿れと。

第二回聖典翻譯

王は二公主の内助を得て、佛教を宣布するに全身を捧げ、自ら佛教の大護者を以て任じ、印度、チバル國より多くの班抵達 (五明博士) を招聘し、坦特羅等の聖典を多く翻譯し、躬からは法輪を轉じて傳道事業に力を歇し、西藏蒙昧の陋俗を化して、醇樸淳風たらしむるに彼の一生は忙せられぬ。王の臨終に及びては、多くの群臣を集め遺誠して後代の昭鑑を示せり、曰く、朕の後、人王五代にして大護法の君主出で、聖法を弘宣して廣大なる事業を成せん。然り而して最も悲しむべきは、かの護法君主の後裔にして、獸類の名稱を有する一王出づべし。彼の王は教法を破壊し、一切の善事業を滅するに至らん。かゝる暗黒時代に遭遇するも、尙聖教の殘火存して、僅かに一縷を留め、それに依つて再び西藏に佛光輝き、清淨の人生じ、佛に歸して永久に護持すべき時代の來るべき由を遺誠し、王は二公主と共に十一面のイーダム (Yi Dam) の相を示現しつゝ、その身は消滅せりと謂はる。維時甲寅歲午月十四日にして、享年八十四歲なりとす。

第四節 西藏佛教隆盛時代

第三回翻譯 スロン・ツァンガンボ王の子、マン・スロン・マンツァン王 (Man-Sron Man-bTsan) 、

その子グンスロン・グンツァン王 (Gün-Sron Gün-bTsan) 、その子デウ・スロン・ヤンボ (hDus-Sron Man-Po) 、その子チーデ・ツクタン (Khri-Lde gTug-bRtan) あり。チーデ・ツクタン王の西藏統御の代には、つとめて佛教を奨励し、教會伽藍を多く勸建せり。又經典の翻譯事業を起して聖典を藏譯せるもの多く、就中、百緣經、最勝金光明經 (gSer-Hod Dam-pa) 等は有名なるものなり。

金城高主とナナム妃との争ひ その子ザンツマ・ハーワン王 (hJan-Thsa Lha-dBan) に至りて唐朝より金城公主を迎へて妃となし、支那より諸籍を將來して西藏の文化發達に貢獻せり。従つて國土も亦漸次擴大膨脹して、威權優に群酋を壓し、國威四隣に振へり。

金成公主一子を産む、不幸にして赤兒夭死す、公主の愁傷限りなし。加之王の叔父は痛くこれを悲しみ、公主に再び嬰兒の降らんことを欲し、自ら釋迦佛像に祈念を凝せしに、靈驗空しからずして戊午歲公主は惻惻なる一子を擧げぬ。その子は即ち有名なるチー・スロン・デツァン王 (Khri-Sron Lde-lu-bTsan) 此れなり。又王は別にナナム國 (Sna-Nam; Samarkand in Bokhara) より迎へし王妃ナナムザ (Sna-Nam bZas) あり。この王妃に子なくして甚だこれを憂へつゝありしに、金成公主の再

び子を産めるを聞きて、嫉妬の念淺からず。金成公主の侍臣等は王子を奉侍して、パンタン地 (Phan-Tian) に滞住せる王に父子の會見を乞はんとて出發せり、ナナムザ王妃の近士等これを聞き傳へ、彼等を路上に擁して王子を奪ひ去り、ナナム妃の所産なりとして養育せり。かくて王子は異母の膝下に在りて生長し、最も可憐なる敏童となりしかば、王子の命名式を行はんとせり、こゝに於て兩妃及びその侍臣采女等は王宮に參朝し、殿上の兩側に威儀嚴然として整列着席せり。この時ナナム王妃の宮女等は、手に華麗なる王子の喜ぶべき璽珞を持しつゝ、この伯母の處へ來れよと呼びしに、嬰兒は可憐なる口を以ていはく、ナナム等の伯母よ、我はナナムザ王妃の兒にあらずして、支那帝の孫なり。我の名はチー・スロンデッタンと稱す、ナナムの人等よ、汝等それ我に向て何をなすものぞと。命名式に於ける兩妃の一子に關する爭論はこの一言にて明瞭となり、ナナム王妃等ははたゞ黙して立ち去りたり。後の人云へり、かの王は童兒頃より自ら名を附けし程の神童なりしかば、即位後に於ける王の大事業を興隆せしは、蓋し小童時代に奇瑞の顯はれしものにて、尋常の王にてはあらざりしなりと讚へぬ。この神童は年十三歳に達し、父王の後を襲ひて即位し、西藏國王となれり。

菩提薩埵の來藏

王は幼より宗教を好み、佛教を以て普く國內に宣布せんと志し、人を支那に派して法を求めしむ、即ちサンシラ (Sanchi) 等の四人は、當時王に依つて派遣せられし支那留學

中の有名なるものなり。又印度より班抵達阿難陀等を聘して翻譯事業を開始し、バサルナン(Sa-dai-ga-Sai Snañ)をチバル國に派して教師を聘せしむ。彼は^{カンツェンポデサト}大堪布菩提薩埵に邂逅し、西藏に來錫せんことを請ひしに、直ちに諾を得たり。乃ち王はサムエー地(Sam-Yas)に大歡迎式を行ひて彼を聘せり、菩提薩埵は西藏に來り、王の請に應じ、十善十八界等の法を講じぬ。時に西藏の地神妖怪等多く現はれて障害をなしければ、佛教を隨喜せざる土民は、これを視て種々誣言誹謗を放ち、大堪布にしてこの物の怪を退治するの法力なくんば、何人かこれを拜するの要あらんやと、理もなき妖言を吐きて妨害を加へぬ、堪布はこれを見て西藏人の到底度し難きを慮り、自からチバル國に還らんとせり、王はこれを聞きて驚き、金銀財寶を捧げ、叩頭合掌、泣涕して、切りに錫をこの土に留め、法を教へんことを懇願せり。されど堪布菩提薩埵は頑として王の請を聞かず、曰く、我今自ら本國に還らんことを欲す、王よ汝は西藏に住せる非人の妖怪を退治せんと欲せば、宜しく^{バトマサンハバ}蓮華生師を聘すべし、これ等の妖怪鬼神の奉事は我の能ふところに非ずとて、蹶然袂を拂ひてチバルに還れり、^{ロホ}教師リンポツェ(Rin-Po-Che)も亦チバルに還りたり。

こゝに於てチ・スロンデツァン王は再びチバルに使節を派して大堪布菩提薩埵の來錫を懇請せり。大堪布は再び西藏に來り、教師リンポツェも亦郷里マンユル地(チバルと西藏との接境チロン小邑)より來藏す。二人錫藏の後十五年間、サムエー地に滯住して法を説き、専ら未開西藏民

の智能を啓發し、宗教的信念を薰陶せり。王はサムエー地に大伽藍を修し、城廓を築きて保護せり。又一般人民に新法令を發布し、國利民福に力を歇し、政教内外相應じて、西藏國基礎建設に專注せり。

蓮華生上師來藏

その後蓮華生師は、王の招請に應じて來藏し、大堪布菩提薩埵と共にサムエー廟に留錫し、相共に力を協せ、佛教弘通に盡瘁せり。未歲印度より説一切有部宗 (Jhams-Cad Yod Par Sura-Bahi Sde-Ba) の比丘十二人を招聘せり。然れども西藏人は有部宗の人に就いて學ぶも、その適否を知るに由なかりしかば、先づこれを試験せんために、七名の秀才を選抜して出家せしめ、教師に就いて學ばしむ、即ちイシ・ワンポ (Ye-Ces dPai-Po) 等は修學生となりし試験の七人 (Sad-Mi hDun) なり。

サムエー廟の壁畫

當時サムエー廟の壁上に、舍利弗よりカンツェン・シワン (寂護) に至る教師相承系即ち堪布系 (mKhan-bSgyud) を畫つて西藏に釋迦の内藏たる毘那耶の傳承を明かにし、以て淨行の修道を傳へぬ。又説一切有部宗の宗脉を傳留せしめんとて、菩提薩埵より起算して八代の傳燈系を畫き、教法の根本たる解脱戒の、何等の支障斷滅を蒙らずして傳承し來りし所以を明かにせり。

第四回聖典翻譯

王は尙印度より多くの班抵達と賢哲を招聘し、西藏民の秀才を選抜して梵語を

學ばしめ、印度語の翻譯者を養成せり。これ等の梵語に熟達せし學生は、教師班抵達の指導の下に於て、經典疏釋を譯出せるもの頗る多し、就中カフ・バルツェタ (Ka-Ba dPa-l-pRsegs) なるものは、彼等學生中の優秀なるものにして、當時譯家の第一と稱せらる。彼は戒律四部阿含 (hDul-Ba Lun Sde-l-Shi) の第一根本阿含の十七(品)の三萬二千七百偈と、比丘尼分別阿含二十八卷 (Lun Rnam-hByed) 々の二部を譯せり。チヨツロ (Cog-Ro) はルーイ・チャルツァン (Kluhi Rgyal-mTshan 龍幢) の著分別阿含 (Lun Rnam-hByed) 二萬四千九百偈と、解脱戒經七百偈 (hDul-Pahi Lun So-Sor-Thar-Pahi-mDo) 々の比丘尼の解脱戒 (So-Thar) 八百偈を譯出す。其他ツロツマナ (Ye-Ro Tsa-Na) 等の翻譯家の經律論三部等を譯せるもの頗る多し。その翻譯經典中、經典の註釋に關するものは、ルーイ・チャルツァンの著書根本阿含廣疏 (Lun-gShi'i Rgya-chel hGrel) 々の「チタテブ (Dul-Bahi lha) の著書、分別阿含疏 (Lun Rnam-hByed-Kyi hGrel)」の持戒者「パーホ (dPa-ha Po) の著解脱戒經持調伏疏 (So-Sor Thar-Pahi mDo hGrel hDul hDsin) ヲマラ・ニットラ (無垢支) の著、解脱戒廣疏選抄、智光の著、根本戒經、同人の著百一業(カルマ・シアタム)三千六百偈と經根本廣疏七十卷、阿羅漢法勝 (Chos-Kyi Tson-dBon) の著、律頌等を譯す。この時王は翻譯家、班抵達等を總集し、聖典翻譯の名目、卷數、偈文の句數を調査し、目錄を製して聖典散佚の豫防に具へたり。

菩提薩埵の示寂 菩提薩埵は來藏以來、多年の間心力を竭し、教法傳播に盡瘁せしも、頑迷固陋

なる西藏民を化すること頗る困難にして、布教傳道の効果を揚るに極めて容易ならざる結果を招き、遂に命壽を終れり、彼は臨終に遺誠して曰く、西藏には外道異論の教徒起らざるも、後世に及び佛敎は必ず二派に分立して紛擾を惹起するに至るべし。その時代にはわが弟子カマラ・シーラを請招してこれ爭論鎮定の導師に仰ぐべし。然らば騷擾治まりて、勝利の王幢は正法に歸すべしと。

第五節 西藏佛敎の確立

支那僧の勢力 西藏には夙に早き時代より、支那僧の來錫して佛敎傳道に従事し、西藏文化の曙光を漏らし、心靈上の化育に薰陶を傾け、大堪布菩提薩埵カンツェンポデサクトブの來藏せし當時は、支那敎學派の努力全藏を風靡して、西藏啓發上その功績の頗る見るべきものあり。されど支那派の敎學は主として觀念論に傾き、諸善雜行の如き方便的修行を排して、單刀直入人心の奥底に達し、佛心と冥合體驗するに勇猛直截主義なりしかば、蒙昧時代に於ける西藏民の鬼神崇拜と、雜行迷信に適せる西藏民の幼稚なる心理に對しては、到底直截簡明なる支那敎學派の説に隨喜すべくも見えざりき、菩提薩埵の遺誠は、蓋しこれ等の印度敎學と支那敎學派との不調和なる鬭争は西藏天地を蔽ひて、兩派の破裂は何日か惹起せずんば止まざるの形勢を看破せしに由らずんばあらず。

支那敎學派と印度敎學派との争論 支那敎學派の説に依れば、敎誠に従ひ、法を修し、善行を爲

すも、そは容易に佛性を覺る能はず。諸行を修し、善行を累積せざるとも、成佛たるに於ては何等の支障あるを見ず。要は只沈思默想の觀念的見道に住すれば足れりとす、敢て雜善集積を行せざるも可なりと。然るに印度敎學派はこれを以て聖敎戒法を修せざる破壊者なりとし、もしかくの如き敎に従は、佛敎は遂に衰頽を招く近因たるべしと斥けたり。時に王も亦印度敎學派に耳を傾け、兩派爭論の結果、印度派の説が西藏人民の根柢に相應すべく思惟せしも、未だ彼等爭論の最後に於てその優劣の何れにあるやに躊躇せり、比丘バーイーシ・ワンゴ王(Sba Ye-Qes dBar-Po)は王に勸めて曰く、王よ、汝は敢て心を勞する勿れ。大堪布菩提薩埵は遺言せずや、かゝる敎派紛擾の起る場合には、弟子カマラ・シーラを聘せよ、然らば顛倒の見解を抱懷せる爭論を鎮定するを得べしと。王は彼の言を納れ、最も鄭重なる禮遇を盡し、カマラ・シーラを招聘せり。こゝに於て支那僧とカマラ・シーラとをサムエー廟に會合し、兩派議論の優劣を闘はしむ、支那僧は多くの弟子を伴ひ、黨内の右側に列し、カマラ・シーラは亦多くの弟子を率いてその左側に座を占めぬ、王は手に華にて造れる念珠を把つて座の中央高臺に登りて曰く、汝等二人は討論を開始せし結果、何れか勝利を占めなば、この華の念珠は勝利者の手に落つべし、従つて勝利者はこゝに逗留するを要すべしと勅せり、支那僧は先づ開口して言はく、一切に於ける事物の知覺(Rtog-Pa)は輪廻を結ぶべき原因なり、故に善惡何れの知覺をも離るゝにあり、何事も心に念はざれ(Ci-Yan Yid-La Mi-bSam)、又何事も

心に作るカニヤン (Gañ-Yañ Yid-Ia Mi-Byed-Pa) 無念無作は輪廻より解脱する善方便の唯一の教なり、かの十地 (Sa bCh Pa) の如カ、布施持戒等はこれ漸門の教にして、眞實に目的を悟る能はざる劣根衆生の爲めに説きし法に過ぎず、心中無作の教誠優婆提舍あらば、何を好んで煩はしくも布施持戒等の修行を要すべき、無念の觀念に住せば一も雜行雜修の必要を見ざるなりと。

支那教學派の敗走

カマラ・シーラこれを反駁して曰く、事物に於ける妙觀察智(知覺的智慧) Sor Rtog-Pahi Ges-Rab) は即ちこれ菩提に入るべき根源たるのみならず、亦法の性命たり。此故に方便と智慧との合一は、佛陀に到達すべき要素なり。もしこの智慧と方便との二者中、何れか其一をも捨離するが如くんば、未來の佛即ちツアンヂヤブ (hTshah-Rgyab-Ba) を證得する能はず、事々物々に就いての知覺的智慧と、雜行との二者中、その一をも分離せば、未來成佛たるべき見道的觀念解脱は證すべからず。たとひ觀念に住するも、無上正覺の如きは到底望むべくもあらず、この故に禪定の教典に據りて思惟し、眞實解脱經等の清淨無垢の諸々の教誠その他あらゆる智慧は、覺佛證得に缺くべからざるものたりと論破せり。この時バーイーシ・ワンボは彼に討論するに、諸種の手眞似を以て彼の智能を試み、支那僧の缺點を發きぬ。バーイーシ・ワンボの明晰なる辯論術と、造詣深き因明とを以ての討論は、西藏語に熟達せざりし支那僧の能く答辯すべくもあざりき。こゝに於て王は討論を判斷して曰く、自今以後、西藏佛教は龍樹の中觀論の宗風を採用するに決定

すと。遂に勝利は印度派に歸し、勝利の華の念珠はカマラ・シーラの頭上に落ちぬ、敗を取りし支那僧は、蒼黃法幢を捲きて西藏を去り、支那に還れり。兩派の爭論はこゝに終結を告げて西藏佛教を確立するを得たり。その後數年ならずして王は崩じぬ、享年六十九歳なり。西藏の信仰者は王を讚頌して文殊菩薩の化現なりと稱す、蓋しこれ王は豪邁不撓、勇猛なる智劍を振ひて國家を開發し、人文の發達に努め、民のために甚だ忠實なる偉業の大成者なるが故なり。

王の子にムネツアンポ(Mu-ne bTsan-po)あり。即位後サムエー廟に於て多くの佛事供養をなし、崇敬を拂ひぬ。王の御代にその臣下に邪惡なる者出で、騷擾三度に及べり、王は勉めて宗教を護持し、その道徳的恩恵に依つて人民を育化風靡せんと圖りしも、意の如くならずして、國家は月に年に多事を極むる中に不幸短命にしてその壽を終へぬ、歳十七なりき。

その後ツンチ・デツツアン・サナレク(gTsun-Khri Sdeju-bTsan Sad-Na-Legs)即位して佛教を保護す。其子チーデーツクタン・ラルバチャン(Khri-Ide gTsung-brtan Kal-Pa-Can)は十八歳にして王位に即き、佛教を奨勵し、人智の啓發を謀り、オジャンド(Hod-ljan Rdo)の伽藍を黄金の瓦を以て葺き、チースロン・デツツアン王の遺蹟を修理するのみならず、西藏の宗教風規を善改擴張するに努めぬ。

第五回の翻譯

王の御代に於て、興學布教に熱心なる翻譯家、班抵達等は相會して議するに、從來の翻譯熟語は種々不同にして用語一定せず、西藏人にして教義聖典を研究する者に最も困難を感じ、印度文明を咀嚼する上に至大なる障礙を有し、修學上不便少なからざればこれが一定の方針を定めんと欲しぬ、乃ち班抵達チン・ミットラ等の博士、語學に熟達せる譯家等相會して、譯語の一定に基きて大小二乗の經典を譯し、次で既に多く譯出せる聖典目錄を調製す。而して王は、新法律を制定して、自今以後西藏民の教義を聞き、思念を凝らす者は、必ずこの大小二乗の聖典に據り、他に如何なる經典あらんも採用すべからず、その依憑すべき諸部中、說一切有部宗に従ひ、一に菩提薩埵の定めし宗派の信徒たるべく、決して他派に據るべからずと命じぬ、尙王はガクバ (Sraggs-Pa) 即ち秘密修驗者の行ふが如き粗野淫蕩なる修行を修する宗派を絶たんと欲して、秘密曼陀羅 (Sādhana-Srags) に關する一切書典の翻譯を嚴禁し、昔日譯せし釋迦の經典を勘校して、その傳燈系を一定し、西藏民修學の標榜に依りて信仰を統一せり。こゝに於て教團は淨化刷新の風規を生じ、優婆塞の沙門に布施するもの多く出で、佛教甚だ隆盛を極むるに至れり。

祖宗の三王

西藏建國の創業者 スロン・ツァンガンボ王、チー・スロンデツァン王及びチーデー・ツクタン・ラルバチャン王は佛教保護上、偉大なる功を奏せしかば、これを祖宗の三王と稱す。その他多くの翻譯家、班抵達等に依つて、西藏は佛教の大恩恵を蒙り、人智の進歩、國利民福は一に彼

等祖宗と、宗教宣布者との餘澤なりと言はざる可らず。されば西藏一般の國民は、當時の諸王及び、熱誠なる傳道者の創定せる聖教宣布の方法規定が、如何にして起り、如何にして成功せしかを尋ね、以て今後に於ける宗教傳道の參考に供へ、益々宣傳努力せざるべからざるの時機に會し、決して無意義の事を行ひ、而してそれを如法に矯正せざるべからざる行爲に陥ることなかれ。如來の歡喜讚仰し給へる最上の方便を修し、佛陀自説の教訓に準じて精進奮闘するは豈これ佛教信仰者の將に勉むべき義務たらずとせんや。(以上嗣出)